

小谷コレクション

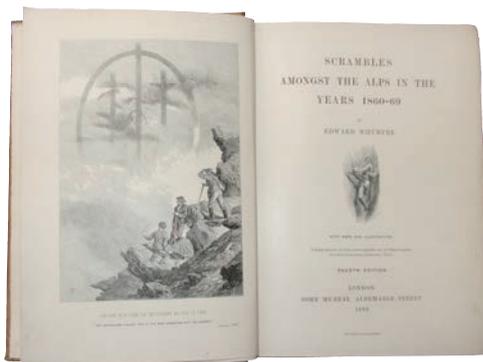
名品

このコーナーでは、近代登山の歴史を語る上で欠かすことのできない名著を展示しています。スイスの名ガイド、クリスチャン・アルマーの手帖(複写本)、マッターホルン初登頂者、エドワード・ウィンパーの名著『アルプス登攀記』などの洋書、葛飾北斎『富嶽百景』や谷文晁『名山図譜』など江戸時代の画帖、さらには、ウォルター・ウェストンの自筆サイン本や、小島烏水にも影響を与えた大ベストセラー『日本風景論』(志賀重昂著)などなど、近代登山の歴史を彩る名品の数々を見ることができます。



57 A facsimile of Christian Almer's Führerbuch 1856-1894 / Reproduced under the superintendence of C. D. Cunningham and Capt. W. de W. Abney ... With an introduction and a photogravure of Christian Almer 1896年

近代スポーツ登山の黎明期に活躍した名ガイド、クリスチャン・アルマー(1826-1898)が所持していたガイド手帖の複写本(200部限定本)。スイスのガイドは案内し終わった時、手帳に登山客に感想などを記してもらっている。アルマーの手帳には、高名な登山家達の礼讃・感謝の文字が書き綴られている。



58 Scrambles amongst the Alps / by Edward Whymper ; revised and edited by H. E. G. Tyndale 1936年

マッターホルン初登頂者として著名な登山家、エドワード・ウィンパー(1840-1911)が、マッターホルン初登頂(1865年7月)とその後起こった悲慘な遭難事故について記した山岳文学の名著。日本でも、浦松佐美太郎氏の翻訳で『アルプス登攀記』として出版され、早くから愛読されている。



59 山と書物(正・続) 小林義正著
昭和32、35年(1957、1960)

山岳図書に関する研究をまとめた書。その範囲は、江戸時代から現代に至るまで、また、洋の東西を問わず広範に及ぶ。著者の小林義正(1906-1975)は中学時代から山に親しみ、丸善に勤務し役員を勤めるかたわら、山岳図書の収集・研究に没頭した。そのコレクション「高嶺文庫」は、1974年に小谷隆一氏に譲渡された。



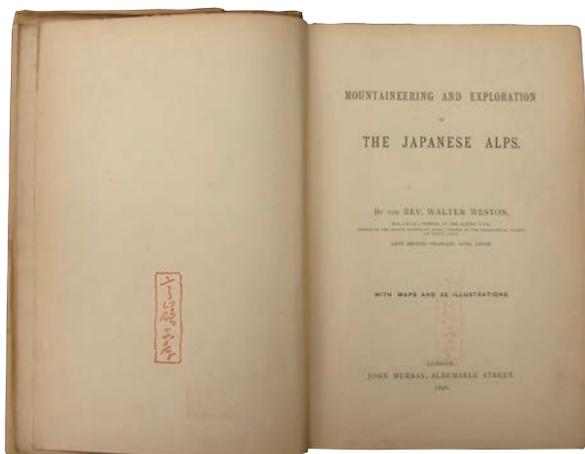
60 秋山紀行 鈴木牧之作 大正時代

『北越雪譜』の著者として有名な鈴木牧之(1770-1842)が、文政11年(1828)9月に信越国境の秘境・秋山郷を探訪した際に、山村の自然や風土、人々の生活様式から独特の風俗や習慣までを詳細に記録し、絵と文章でまとめたものである。本書は、大正時代初期、京都大学教授清野謙次が弟子に写させたもので、稀少な伝本である。



61 富嶽百景 葛飾北斎画 天保5年(1834)

江戸時代を代表する浮世絵師、葛飾北斎(1760-1849)の写生集。天保2年(1831)に刊行された「富嶽三十六景」と並ぶ風景絵本の代表的傑作。写實的浮世絵に新しい境地を拓いた。当時の風物や人々の生活を巧みに交えながら、各地から望む富士山の景観を描いている。作画に対する情熱を綴った跋文は有名である。



62 Mountaineering and exploration in the Japanese Alps / Walter Weston 1896年

宣教師として来日した際に登山した浅間山・富士山・北アルプスの紀行文を収めた、日本近代登山史における歴史的書物。著者ウォルター・ウエストン(1861-1940)は、明治21年(1888)以降3度来日し、数々の山に登った。サー・アーネスト・サトウ(イギリス駐日公使)に対するウエストン直筆の献辞がしたためられている。



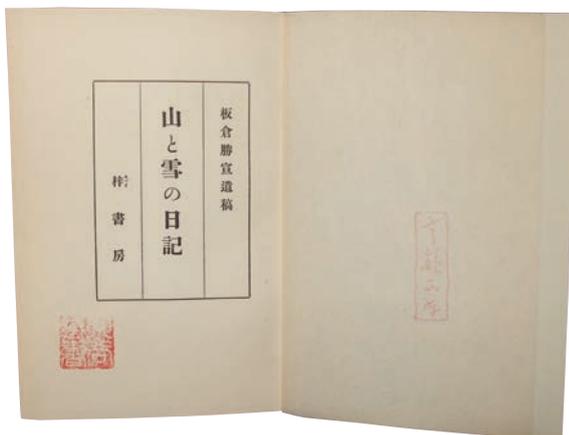
63 日本風景論 志賀重昂著 明治27年(1894)

地質学者、志賀重昂(1863-1927)が日本風土の美しさを科学的見地から説明した書。槍ヶ岳を初めとする山々のガイドブックも兼ねている。初版は3週間で売り切れ、15版を重ねるベストセラーとなった。日本の近代登山におけるパイプ的存在であり、小島烏水を初めとして、後代に多大な影響を及ぼした。



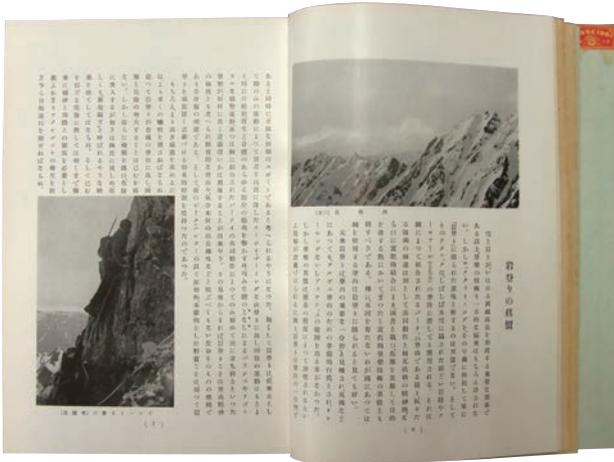
64 黒部谿谷 冠松次郎著 昭和3年(1928)

冠松次郎(1883-1970)が自ら黒部の山や谷を踏査し、まとめた地域研究書。大正時代半ばから昭和初期にかけて、ほとんど知られることのなかった黒部の自然を、研究的な立場から紹介している。本書は随所に写真・地図・道程表などが挿入されており、当時のこの山域の案内書としても重きをなしたものと考えられる。



★65 山と雪の日記 板倉勝宣著 昭和5年(1930)

二十五歳でその生涯を閉じた登山家、板倉勝宣(1897-1923)の遺稿。本書は板倉の死後、友人たちの手によってまとめられたものである。収録された作品は紀行・随想・日記・詩など計33編にわたる。著者は、我が国最初の山岳雑誌『山とスキー』を刊行し、自らの登山思想を披瀝することで若い登山家の啓蒙に努めた。



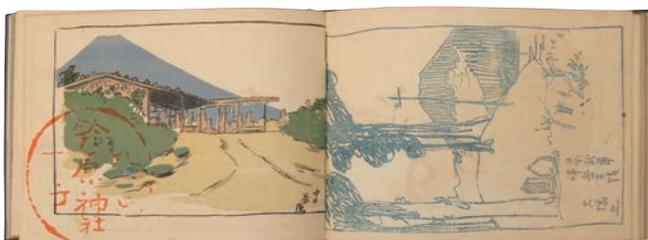
66 槍・穂高・岩登り 藤木九三著 昭和6年(1931)

写真と解説を兼備した岩登りの技術書。本文は近代登山の特質、岩登りの真価を説いた後に、用具の使用法、組の編成、岩場での練習法等の基礎技術から、連続登攀、一枚岩の登降等の特殊技術までを解説する。藤木九三(1887-1970)は京都福知山生まれ。昭和3年(1928)に、日本初のロック・クライミングを目的とした山岳会(RCC)を発足させた。



67 日本アルプスへ 窪田空穂著 大正5年(1916)

大正時代から現代にかけて活躍した詩人、窪田空穂(1877-1967)による紀行文。島々から徳本峠を越え上高地に入り、槍ヶ岳と焼岳に登った記録が綴られている。窪田空穂は北アルプスで2度大きな縦走をしており、その記録を大正5年(1916)『日本アルプスへ』、大正12年(1923)『日本アルプス縦走記』として出版している。



68 富士山スケッチ 杉浦非水著 明治41年(1908)

近代日本のグラフィックデザイナー、杉浦非水(1876-1965)による富士山麓周辺のスケッチ集。著者は明治9年(1876)、愛媛県松山市で生まれた。上京後、東京美術学校で日本画を専攻。アール・ヌーヴォーの作品に魅せられて、以降は商業美術の第一人者としての道を歩み始めた。本書には、非水自身が記した『登嶽日記』が付録されている。



69 名山図譜 谷文晁画 河村元善編
文化2年(1805)

谷文晁(1763-1840)が日本の北から南まで八十八の山を描いた山岳写生画集。書肆は江戸西村宗七。『名山図譜』は版をかさねて文化9年(1812)には『日本名山図会』と改題し、山の数も2座追加されている。本書は、文化2年(1805)の初版献呈本であり、現存する『名山図譜』のなかでも極めて貴重な文献である。



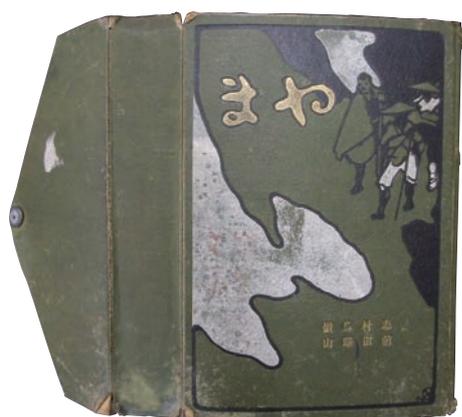
70 雪華圖説(正・続) 土井利位作
天保3、11年(1832、1840)

下総古河藩主であった土井利位(1789-1848)が著した、日本初の雪の結晶についての研究書。オランダ渡来の顕微鏡を用いて観察・写生した結晶図をはじめ、結晶のできかた、雪の効用などが記されている。本書の数年後に刊行された鈴木牧之の『北越雪譜』のなかにも、雪の形という項の中で土井利位の説が紹介されている。



71 屋上登攀者 藤木九三著 昭和4年(1929)

登山家、藤木九三(1887-1970)の随筆集。ザイルテクニックや雪氷技術などの話題とともに、「屋上登攀者」を含む優れた詩が数編掲載されている。日本初の岩登りの理論書『岩登り術』の著者である藤木は、ロック・クライミングを目的とした山岳会、RCC(Rock Climbing Club)の創設者でもある。



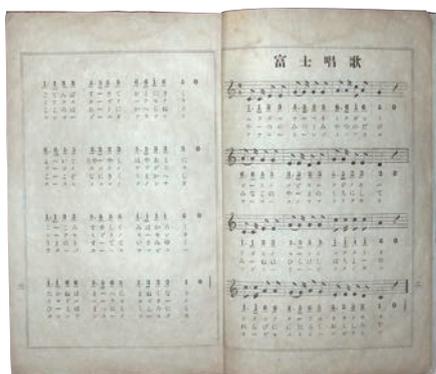
72 やま 志村烏嶺、前田曙山著 明治40年(1907)

登山家の志村烏嶺と小説家の前田曙山による、日本アルプスをはじめとする山々の研究及び紀行文集。随所に列挙された高山植物目録や、スケッチ画は貴重な資料である。巻頭の12枚の写真が、当時の日本アルプスの山容を美しく再現している。装幀にも工夫が凝らされた逸品である。



73 みなかみ紀行 若山牧水著 大正13年(1924)

明治から昭和初期にかけて活躍した歌人、若山牧水(1885-1928)の紀行文集。本書は、故郷沼津を出発し長野県・群馬県・栃木県を巡った24日間の長旅を綴ったものである。牧水の紀行文中最長で、題名は利根川の水源地を訪ねるという意味で命名されている。文中には、行く先々の情景を歌った短歌が散りばめられている。

74 富士唱歌 大和田建樹作詞 上真行作曲
明治35年(1902)

大和田建樹(1857-1910)作詞、上真行(1851-1937)が作曲した、富士唱歌の楽譜及び全歌詞が掲載された書。19番まで歌詞があり、富士山の荘厳さと、忍耐や勇敢さなど登山に必要な精神が歌われている。序に「忠君愛国」「国家の慶事」とあり、当時の国民教育の一環として用いられたと考えられる。



★75 信濃の花 田中貢一著 明治36年(1903)

信濃の高山植物16種について、理学的考察と詩的観察を行った書。著者の田中貢一(1881-1965)は現在の塩尻市(旧長野県東筑摩郡広丘村)の出身で、長野師範学校に在学の頃から植物研究に取り組んでいた。後年、信州に多大な影響を与えてきた信濃博物学会の機関紙『信濃博物学雑誌』の編集主任も務めた。